

# みぬま通信 第76号

2018年10月



## 見沼たんぼくらぶのイベント

### 子供連れの多い秋野菜栽培

9月1日(土)10時より曇天のもと、見沼ふれあい農園(二号地)での第1回目の作業である秋野菜の種蒔が行われました。当日の参加者は県民を対象とした応募者を中心に109名ありました。この内、子供の参加は42名と全体の約4割であり、その多くは小学校低学年生以下によって占められています。



事前に準備された施肥済みの畝数は102畝です。播種の対象品種は大根(青首大根など3種)・蕪(聖護院蕪など4種)・小松菜・ほうれん草・春菊・水菜となりました。

セレモニーの後、秋野菜の種蒔のやり方などの説明があり5班編成で種蒔作業を行いました。各班は家族単位で構成され、子供たちは小さい手で小粒の種子を畝の所定の場所に真剣にまた丁寧に、一生懸命種を蒔いて微笑ましい状況がいたるところで見かけられました。良い成果を期待したいものです。

参加者が多いため、更に効率的な作業の推進が功を奏して11時過ぎには畠全体の種蒔の作業が無事了しました。今後3回の除草・間引きなどの重要な栽培作業を経て、11月には収穫日を迎えることになります。これからも作業を着実にこなし、本日蒔いた秋野菜が立派に成長し、豊作と共に喜び合えることを期待したいものです。

(若野 忠男記)

### 福祉施設に寄贈する里芋・八つ頭・生姜栽培

このテーマでのレポートは今年7月に発行された、みぬま通信第75号の後編である。執筆者が違うので文面などに若干の違いがあると思われるがご了承願いたい。

5月1日に種芋と種生姜の植え付けをしてから、8月2日までの里芋・八つ頭・生姜を育てるための除草を重ね、合計6回の作業が終了した。あとは11月に予定されている収穫を待つのみである。この場所(緑区見沼)での野菜作りは今年で7年目になる。当初は一部の役員だけであったが、毎年少しずつメンバーも多くなり、今年のスタートは23名の会員が参加してくれた。3回目の6月7日は雨天のため順延となり参加者は激減したが、この日以外はいつもの顔ぶれが参加していた。4回目、5回目と回を追うごとに雑草との追いかけっこになり、仕事はますますハードになってくる。8月2日は酷暑のなかでのすさまじい作業となる。

この日も何人もの方からの差し入れがあった。現地調達の野菜ジュースやレモンと蜂蜜の特性ジュース等々、汗と泥にまみれた体が一瞬にして命を吹き返したようになる。畠は野菜の生産だけではなく、ここでは楽しく頼りになる仲間も育成しているのである。

ご参加の皆さんお疲れ様でした。11月の収穫を楽しみにしましょう。収穫をした野菜は5ヶ所の福祉施設に寄贈することになっています。(佐々木 明男記)



# 見沼たんぼくらぶのイベント

## 見沼塾講演「見沼代用水の歴史と現状」

6月16日（土）、清水実先生（見沼代用水土地改良区企画調整室長）による「見沼代用水の歴史と現状」と題する講演が、見沼グリーンセンターで行われました。講演は10時から行われましたが、見沼代用水は同じ県内の葛西用水、愛知県の明治用水と共に日本の三大農業用水といわれているだけに、興味をお持ちの方が大勢おり、およそ30名の方々が受講されました。

先生はまず、見沼土地改良区について簡単に触れましたが、課題に示す本論に入ると、説明図や写真等をプロジェクターで投影しながら一段と声を大きくし講演するのでした。「これは重要事項・・・」と思われる箇所は、ゆっくりとした口調で話すあたりは、流石に場数を踏んだ講師と思いました。以下に、講演で得た概要について触れてみたいと思います。



(熱の籠った講演中の清水先生)

かつて見沼は、武蔵国一番の大きな沼でしたが、寛永6年（1629）、関東郡代・伊奈忠治が八丁堀堤を造成し、「溜井」とし農業用水源としました。この結果、下流域の約500haの農地を潤す事が出来るようになりました。

享保元年（1715）、徳川吉宗が八代将軍になった頃、幕府の財政状況は厳しく、財政を再建するために年貢増収の手段として新田開発を奨励したのでした。しかし、新田開発に限界を感じていた吉宗は紀州藩主当時、治水事業に詳しかった井澤弥惣兵衛為永を、享保七年、江戸に招き入れたのです。

享保十年、為永は吉宗の指示の下で新田開発のためにこの溜井を干拓。そして干拓後の水源を利

根川に求め、享保12年から「見沼代用水」の工事を開始しました。難工事でしたが元荒川には「伏越」を綾瀬川には「掛けとい」を、という当時の最高技術を使って構築、延長が約60kmもあるにも拘わらず、紀州流の技術を使って翌年春に完成させました。この結果、溜井の約1200haは新田開発され、その上、八丁堀下流域の水源をも確保できたのです。



(当時の見沼代用水取水口付近の図：講演時資料)

さらに享保16年、代用水の東縁・西縁の両水路と芝川とを結ぶ通船堀を、日本最古の閘門式運河にて完成させ、荒川（隅田川）を経由し、江戸と見沼代用水周辺の村々との舟運を可能にするに至りました。通船堀は昭和6年（1931）まで運用されて、当時の交通運輸面に大きな貢献を果たしてきたのです。

現在、代用水の施設を改修して「埼玉合口二期事業」が実施され、農業用水の安定供給と水利用の合理化を図ると共に、余剰水を埼玉県と東京都の水道水への転用に当てております。

また、代用水と斜面林とが見沼たんぼの原景保全に合致する区間をトラスト一号地としたり、「緑のヘルシーロード」などの環境整備事業の実施、親水公園などの水辺空間の演出、用水路を巡るウォークラリーのイベントの開催など、代用水の活用は多岐に及んでいます。

今回の講義は上述の様でありましたが、参加された方々は、為永の偉業に一層の理解を深め、説明の節々では大きく頷く姿が見られました。

（召田 紀雄記）

# 見沼たんぽくらぶのイベント

## 第115回見沼塾

### 見沼たんぽくらぶの昆虫観察

開催日 2018年7月7日(土)

参加者 17名（うち子ども1名）

講師 牧林 功（元埼玉昆虫談話会会長）

助手 鷺 大淇（埼玉昆虫談話会会員）

「退化は進化である」。今回の観察会で胸に響いた言葉のひとつである。

今回も牧林先生と、鷺大淇先生とのコンビネーションである。お二人の熱が伝わる、活気ある観察会となった。

牧林先生から冒頭の言葉が飛び出したのは、オレンジ色が鮮やかなセイヨウミツバチを捕獲し、皆で観察していた時だった。「ハエとハチの違いは？」とのご質問に皆で頭を捻っていると翅の枚数であるとのご説明であった。

ハチの翅は4枚。ホバリングなどバランスをとるのには向いているが、素早く動くことは苦手だ。対してハエは2枚。半分を退化させることにより、身軽になって素早く飛ぶという進化を遂げた。ハエ叩きを空振りし「憎たらしい！」と悪態をつくのは、私だけではないはずだ。

私はミツバチの「花粉カゴ」に興味があった。観察してみると後ろ足は平たい形をしている。内側は毛が密で、粘っこい花粉が絡みやすくなっているらしい。足を器用に動かすことで花粉が丸く団子状になるのだ。面白い！

ひらりと網が舞いキタテハを捕まえた。「足の数は何本ですか？」蝶々だもの6本…あれっ！4本しかない！

実は前足は非常に小さくて顔の横にちんまりと畳んでいた。足としての機能を捨て、センサーに絞ったのだという。

蝶の前足はセンサーである。草に舞い降り、前足で叩く仕草を見ることがある。叩くことで食草を見分け、卵を産み付けている。

花壇の中に外来種と思われるダンゴムシが居る。ふと視線を上げたらスズメガの幼虫と目が合

ってしまった。もうかなり大きい。子供さんが捕まえて皆に見せてくれた。

足が沢山あるように見えるが本物の足は前の3対（6本）のみ。あとは偽足で、成虫になると



消えてしまう。

斜面林に向かい、鷺先生が作られた標本を見ながら講義を受ける。

クロシデムシやチビアオゴミムシは、見沼田んぼで数十年も見られなかったものが、ここ数年で捕獲できたのだという。広範囲の湿った環境が失われるということは、昆虫の生活にも大きな影響



を及ぼしていることを実感した。

観察会は解散となったが、子供さんが斜面林でタマムシの死骸を見つけた。ママさんにお願いして写真を撮らせて頂いた。実に美しい。メタリックカラーで虹色に光る。

「玉虫厨子」の記憶が蘇った。天平の頃から色褪せない翅の尊さ。人々が祈りを託すのに相応しい美しい輝きであった。

（木戸口 美香記）

# 見沼たんぽ水彩スケッチ紀行

## 高沼用水路（鴻沼川）

JR 与野本町駅の東側徒歩 2 分、高沼用水路に架かる霧敷橋にて北側をスケッチしたもの。

井沢弥惣兵衛為永翁は徳川吉宗の命を受けて見沼代用水の掘削を進めたが、同時に現在の中央区に当たる与野地域を灌漑するため、見沼代用水西縁の北袋から分水して高沼用水路を作った。

この用水路は鴻沼川となって新都心駅南側の高台橋で中山道を潜り、鴻沼周辺や与野地区の新田を潤して鴨川経由荒川に合流している。西堀にある沿岸の鴻沼資料館では各種の関係資料が見られる。

絵と解説 八木一郎



## 大崎公園東縁のスズカケノキ(鈴懸の木)

スズカケノキは街路樹として利用されているが、見沼代用水の東縁・西縁では里標として多く使われている。

大崎公園と見沼代用水東縁の間の道路には桜並木が続いているが、その中でも特徴のある実をつけた姿はひときわ目立つ。

実は直径 3 – 4 cm の特徴のある集合果の球状で、先には鋭い棘がある。



## 黒塚山・大黒院

大宮公園の南東にあり、大黒院にまつわる黒塚の鬼婆伝説が伝えられている。昔鬼婆が往来の女を誘って家に泊ませ、殺して血を吸い肉を食べていた。

鬼婆を退治したのが東光坊阿闍梨裕慶（武藏坊弁慶の師匠）で、鬼婆を黒塚と呼ばれる墓に葬ったのが現在の「黒塚山大黒院」あたりといわれる。

2017 年 5 月現在無住寺となっており、スケッチできたのは本堂の一部のみとなった。

## 見沼たんぽくらぶ会員作品展

見沼たんぽのフナノ

作者 佐藤 詔

2 年ほど前、夕暮れまじかの見沼たんぼを散歩していた時ポンとこの藁塚が目に入りました。懐かしい故郷を想い出しながら描いた作品です。この地域では 50 年程前までは稲刈りのあと、船を形どった「フナノ」と呼ばれる藁塚が家畜のえさや燃料、藁細工などの目的で広く作られていましたが、その後時代の移り変わりで今は見られなくなったとのことです。秋の夕暮れの見沼たんぼの風景が消えてゆく生活文化の象徴を思い重ね描いてみました。私は油絵を趣味にしておりましたが、「見沼スケッチ会」皆さんの作品の水彩画の透明感の良い点を勉強したいと 2 年前に入会させて頂きました。



# 見沼たんぽ探訪記

## 緑のトラスト保全第1号地

6月の中旬、「緑のヘルシーロード」を見沼代用水東縁の流れに沿って、見沼自然公園、五斗蒔橋、鷺神社と進むと、総持院橋からはアスファルト舗装が煉瓦舗装に変わる。ここからが「さいたま緑のトラスト保全第1号地」で、代用水の左岸は斜面林となり、竹林や樹林の葉が緑を一層濃くして、目に痛いほど入ってくる。

おおむね300mに亘るこの区域の用水路は、両岸と底の3面がコンクリートではなく、江戸時代に建設されたままの状態で残されているという。さらに水路と斜面林とが一体となっており、当時の原風景をそのまま映し出している。正に歴史が語る貴重な自然景観である。

さいたま緑のトラスト運動とは、広く県民から寄付を募り、これを資金として埼玉県内の優れた自然や貴重な歴史的環境を買い取って保全する運動である。そして取得した保全地は県民共有の財産として、公益財団法人さいたま緑のトラスト協会によって保全されて行くという。

県内の保全地は現在14ヶ所だが、第1号地は平



成2年度～平成3年度に取得した県南地域の斜面林で、アカシデ～イヌシデ林、ケヤキ～ミズキ林、竹林の3植生で構成され、草本類はウラシマソウ、ノウルシ、ハンゲショウ等の種が、また鳥類ではカルガモ、カッコウ、オオヨシキリ、シジュウカラ・・・等、季節によって各種の姿が見られる。

このように当地では、貴重な動植物の保存と共に用水路と斜面林との当時の景観を存分に楽しむ事が出来るのでした。  
(召田 紀雄記)

## 里山に石仏を探して

見沼区の片柳地区は、自然豊かな場所として知られているが、このあたりは庚申塔に代表される石仏が多いところとしても知られている。



今回は特に岩槻で活躍した石工田中武兵衛の庚申塔について紹介をさせていただく。

バス停三崎台から、共立病院の方に向かう途中に屋根付きの庚申塔がある。よく注意して見ると台座に、石工武兵衛と刻まれている。

次に旧坂東家の裏手から大宮聖苑に向かう切通しにも同じ武兵衛作の庚申塔がある。ここは、廃道になってしまったような場所であるので、知る人は少ないと思う。

更にもう一基、ここから歩いて常泉寺に向かうと、山門に向かう道端にも武兵衛の最高傑作とされる庚申塔で、躍動感あふれる造りである。

数ある石仏を代表するのが庚申塔であるが、石工の名前が刻まれているのは極めて少ない。

自然観察の折に皆さんにも足元の石仏にも気を付けてみていただければ、歩くことの楽しが倍増すると思います。

城下町宿場町として栄えた岩槻もその周辺地域は、何人もの石工が活躍した場所でもあります。

(佐々木 明男記)

# 見沼たんぼの仲間たちNo.47

さいたま市立大宮東小学校

## 見沼たんぼで総合学習 すでに13年

2006年（平成18年）に始まった見沼たんぼの総合学習は今年で13年を迎えました。

毎年6月に学年行事としてNPO法人自然観察さいたまフレンドに指導を依頼しています。

### 未来に残そう！ふるさとの自然

これが学校側で定めた行事名です。

コースは、見沼たんぼ地域北西部、大宮区と北区と見沼区にまたがった緑地帯です。

大宮東小学校⇒大宮第二公園広場…見沼代用

9時・初めのつどい

水西縁…見沼1丁目緑地…芝川…大宮体育館…

水田&畑 WC

大和田緑地公園特別緑地保全地区…芝川第7調

節雜木林&谷地 (予め魚やエビ捕獲)

池…大宮第二公園広場⇒大宮東小学校

12時・終りのつどい

## 今年6月25日・第4学年総合学習

児童：3学級118名（6班編成）

引率職員：4名（付添父母：6名）

自然観察指導員：10名

コースは例年通り、水田地帯と雜木林&谷地を主体としました。

自然観察の視点は、五感を使って自然と向き合うことです。また、ゆたかな自然があるバロメーターとなる絶滅危惧種を探すことです。



▲大宮第二公園で初めの集い

## 児童のリポートから

児童からの札状を兼ねたリポートを紹介しましょう。「ぼくは、今までこの辺りの自然のことがあまり知りませんでした。ですが、今回の説明をしてくださって、絶滅危惧種のトウキョウダルマガエルを捕まえたり、いろいろななき声をきいたり、葉のにおいをかいだり、実をたべたり、いろいろな体験ができました。」

「アマガエルを初めてつかまえることができました。そして、色がへんかすることに驚きました。」（握ってもらうと、緑が手の色に変化）

「いねは2たばで1ぱいのお茶碗のごはんになるなんてびっくりです。」

## 学級担任の先生からのコメント

見る・聞く・触れる等五感を使って実際に自然に触れながら指導いただいた。

児童の質問にも細かく対応していただけた。

実際に生き物を捕り、観察し、自然に返すことで、地域の身近な所にもたくさんの生き物が生息していること、その生き物の特徴や生命の大切さも学ぶことができた。

また、地域に残る絶滅危惧種を含め自然を大切に守っていきたいという気持がたかまつた。

## 今秋10月には第3学年総合学習予定

(NPO法人自然観察さいたまフレンド)

代表理事 小野 達二記)



▲ 楽しいな見沼たんぼ

# 見沼たんぼを支える農家さん

## 齋藤農園 齋藤 武さん

さいたま市と蓮田市の境に位置する丸ヶ崎地区には、平成27年農林水産省の地域資源保全地区に指定された33haの水田が広がっています。ここで6haもの田んぼを耕作しているのが齋藤武さんです。

14代ほど続く農家の長男として生まれ、子供の頃から家の手伝いはしていたけれど嫌だった、と笑う武さん。青春時代は、社会的に農業が低くみられていたことや、長男だから家を継がなければならぬという縛りなどに反発して、一時は就職して会社員の生活を選びます。農作業の中で畔塗が一番嫌いだったそうですが、その後、農業も機械化が進み、畔塗機を購入した父の「使ってみないか」というさり気ない一言に誘われてやってみたことが、戻るきっかけになったそうです。そして一度外に出て様々な経験を積んだことが、その後の農業経営に大きく役立ったといいます。

このあたりでも大半の人は米を作ってもしょうがないと言うけれど、大事なことは単に生産・販売するのではなく、商品化すること。特に都市農業にはそれが求められる。そして自分が生産したものには最後まで責任を持つこと。かつては米は玄米一俵(60kg)でまとめて売るだけだったが、今は対面で消費者にじかに販売している。すると、クレームや要望などを直接聞くことができる。そ



(一面に広がるたんぼ)

これから何が求められているのかを考え、対応していくことが必要だ、と齋藤さんは言います。例えば、齋藤さんの田んぼでは殺虫剤を使っていないので、カメムシが米の汁を吸った跡が米に黒点

として残っていたり、草の種が混じっていたりすることがあります。まず精米前にそうした異物を取り除くカメラ付きの機械にかけます。さらに精米後にも割れ米を除く機械にかけ粒を均一にしています。ここまでこだわることで、求められているきれいに粒の揃った均一に炊き上がる米を作りだしています。



齋藤武さん)

実は齋藤さんにはもう一つの顔があります。それは和太鼓奏者。太鼓を始めたきっかけは、父から「地元の付き合いもしろ」といわ

れて、お祭りなど地域のイベントの際に叩くようになりました。最初は嫌々だったそうですが、その後はグループを立ち上げて国内だけでなく海外でも演奏するほどの本格派です。ここで世代やジャンルの違う人たちと付き合うことがまた大きな刺激になっているそうです。

家の前には、間もなく収穫を迎える頭を垂れた稲穂が、吹き渡る強い風にうねって大海原のように広がっています。あれだけ嫌だった百姓が、今は嫌ではない。百姓でも生活できるということを見せたい、と語った言葉が大きく広がっていくようでした。

取材：島田由美子・高橋いずみ  
文責：高橋いずみ

自宅直売は齋藤農園：見沼区丸ヶ崎 1914

Tel : 090-3234-8539

丸ヶ崎直売所でも購入できます：見沼区丸ヶ崎 17-1 Tel : 048-687-2045 (火・木・土 12:30~16:00)

## 見沼たんぼくらぶのイベント案内

### 第9回見沼たんぼ清掃ボランティア

11月3日（土・祝）10時～12時  
市民の森 見沼グリーンセンター集合・解散  
◆見沼たんぼを貫流する芝川（神明下橋～石橋）周辺を散策し、ゴミを收拾します。  
老若男女どなたでも参加できます。  
申込み：当日、集合地で9時30分～10時まで受付

参加費：無料

参加記念品：見沼たんぼのありがとう米  
交通：JR宇都宮線土呂駅東口から徒歩約10分  
(見沼代用水西縁「川島橋」の東側)

### 斜面林の体験学習～落葉かき

12月9日（日）9時30分～12時  
さいたま市立大宮体育館正門内側集合  
◆見沼たんぽ最大の斜面林&谷地「大和田緑地公園特別緑地保全地区」で落葉かき実習  
申込み：当日、集合地で9時～9時30分受付

参加費：無料

交通：東武アーバンパークライン（野田線）大宮公園駅又は大和田駅から徒歩約20分

### 市民と行政の協働事業

#### 第15回さいたま市みどりの祭典

日時：10月21日（日）9時～16時  
会場：市民の森 見沼グリーンセンター芝生広場

◆「みどりに親しみ、みどりから学び、みどりを守り育てましょう」というスローガンの下に、市民団体・学校・行政関係との協働事業です。来場者が「作る」「調べる」「動く」ことを主体とする市民参加型のイベントです。誰でも参加できる青空ヨガや野口喜広のオカリナ演奏もあります。

J Aの野菜販売と福祉施設の飲食物販売以外はすべて無料です。

交通：JR宇都宮線土呂駅東口から徒歩約10分  
(見沼代用水西縁「川島橋」の東側)

または、東武アーバンパークライン（野田線）大和田駅から徒歩約20分

### 第16回見沼区ふれあいフェア

日時：11月10日（土）9時30分～15時30分

会場：見沼区役所駐車場～堀崎公園

◆見沼区内の自治会・市民団体・行政の関係団体を主体に多種多彩な催し物展開。

### 加盟団体主催のイベント

#### N P O 法人自然観察さいたまフレンド

#### 『第251回見沼たんぼ緑地の自然観察会』

日時：10月13日（土）9時30分

集合地：合併記念見沼公園管理棟

◆自然観察指導員のガイドで、園内及び南方の公園拡張予定地（見沼代用水西縁～芝川の間）を散策し、秋の野の花や小動物を観察します。

申込み：当日、集合地で9時～9時30分受付

参加費：¥500

交通：大宮駅東口よりバス④「自治医大行き」終点下車（徒歩約2分、自治医大南側）

### 見沼たんぼくらぶ入会を勧めます

◆季刊「みぬま通信」を郵送します

◆年会費 個人(同居の家族単位)

1口¥1,000円以上

団体・企業は3口3,000円以上

### みぬま通信第76号

発行日 平成30年10月1日

発行所 見沼たんぼくらぶ

〒337-0053 さいたま市見沼区大和田町

1-2124-3 小野方

TEL・FAX (048) 683-1764

E-mail t.ono@axel.ocn.ne.jp

URL <http://minumatanbo.web.fc2.com/>